



小著紹介「新・包装“国際化”宣言」近未来の包装 メガトレンドを読み解く

(Future is Here! Insight into Global Megatrends in Packaging)

有田技術士事務所 所長（技術士・包装管理士）

有田俊雄

1. はじめに

昨年2018年は、筆者の長い包装人生の中でも特筆すべき一年であった。6月には、一般公開された無人コンビニ Amazon Go の1号店（シアトル）を体験し、その足で、Walmartの本拠地であるアーカンソー州 Bentonville を訪問、Amazon.com に対抗する Walmart のいくつかの対応策を現地店舗で視察した。10月の東京パックでは、日本包装専士会所属の現役包装人との2年がかりのプロジェクト「2030年の包装未来予測」を公開。11月には小著「新・包装“国際化”宣言」の発刊と続いた。この間、10月25日開催の食包協・第52回食品包装シンポジウム「食品包装の脱ガラパゴス化」にはパネラーとして参加、「日本の包装技術を世界のスタンダードに」と訴えた。

筆者は、2016年1月発刊の食包協会報（149号）でも「年頭所感－2030年の包装未来を考える」と題して寄稿させて頂いている。同じ題名での2019年度版をとも考えたが、その大部分は小著の中で予見されたことであるので、手前味噌ながら、年頭所感を「小著紹介」という題名に替えての寄稿をお許し頂きたい。

2. 現場視点と未来志向、そのユニークな内容

小著「新・包装“国際化”宣言」（写真）は、缶詰技術研究会の月刊誌「食品と容器」に、2013年10月号から2018年8月号までの5年間、30回にわたって隔月連載された「海外に見る容器包装最新事情」を、一冊にまとめたものである。執筆時点と状況が異なるものや変化した事象もあるため、各章の終わりに「筆者コメント Up to Date!」を書き添えた。

まえがきは次のような書き出しで始まっている。「包装の特徴は“変化”である。製紙メーカーの生産技術者（作るひと）から一転して、商社系の包装専門会社に中途入社した際（作らないひと）に、自分に課した“生涯、包装人を目指せ!”とともに発した私の言葉である。それから、40数年を経た今日、筆者が読者の皆様に贈る言葉は、“変化は突然にやってくる”である」

さらに続けて、筆者は、過去50年近くに及ぶ包装人生を振り返って、自らを次のように紹介している。「その時々に応じて常に未来志向であり、未来へのヒントは既に地球上のどこかにあると信じて、海外の包装トレンドに向かっていた。根っからの“現場人”でありレポーターである。現実のヒト、モノ、コトに触れ、その奥にある真実、未来を切り拓くヒントをつかみ取ってきた」



その通り、ここでは、日本の包装界にじわりじわりとボディブローのように効いてきている包装を取り巻く環境の変化を、海外の現場に足を運んだ見聞をもとにいち早く取り上げ、「変化がやってくる、迅速な対応を！」と呼びかけている。これらは、世界レベルで見れば、決して“突然の変化”とはいえないかも知れない。我々が“突然に”と感ずるのは、それらがある日”突然に”日本政府やメディアに取り上げられ、我々が緊急の対応を迫られるからである。変化を先読みすれば、そこには、海外の業界団体や企業が、時には NGO や NPO 等の外部の力を借りながら、「非競争分野の共通課題に対して力を合わせ、ルール形成や世論形成に動いている姿」、つまり、変化の前兆を見ることができるといのである。

全体は30の主題と展示会レポート（interpack 2017）で構成されている（主題と副題：末尾ご参照）。

地球温暖化、サステナビリティ、食品ロス、包装材料のポジティブリスト、プラスチックによる海洋汚染、循環型社会とプラスチックリサイクルなどのグローバルな共通課題とともに、ミレニアルズ世代を中心とするデジタルネイティブな生活者や、これに対応しようとするブランドオーナーや小売業の変化をも取り上げている。実店舗型 Walmart とネット販売 Amazon.com との間の小売り戦争勃発見聞記も小著の中にある。

硬質容器から軟包装へのメガトレンドが随所に紹介されている。ここでの隠れた主役は、ジッパー、レトルトパウチ、バリア樹脂、透明蒸着フィルム、スパウトパウチ、製袋加工など、日本発の技術である。軟包装は、日本では既に成熟していると考えられているが、複合材料のモノマテリアル化やリサイクル容易なパウチの形状という点では、再び世界の包装界に栄光を取り戻すチャンスでもある。

新素材・新技術・リサイクルインフラについても、以下の内容が紹介されている。これらを“大学発ベンチャーに注目”と位置づけている点も小著をユニークなものにしている。

- ・石油由来ペットボトルのバイオ素材による代替
- ・非可食性・未利用資源からバリア素材
- ・撥水性包装材料
- ・リサイクルビジネスモデル
- ・マイクロ波利用の殺菌技術
- ・天然由来の鮮度保持技術
- ・腐敗検知スマートキャップ
- ・ペット樹脂を食べる微生物
- ・複合材料の素材還元技術

3.（最終章）近未来の包装メガトレンド展望

ー読み解くカギは「循環型社会」および「デジタルネイティブな生活者」

以下は、最終章からの引用である。

世界は、少なくとも2030年を一つの区切りとして、次の4つの目標（Goal）とその枠組みに向かって進んでいくものと思われ、その各場面において、パッケージの果たす役割が求められる。

- 1) 国連を中心とする「持続可能な開発目標（SDGs）ー我々が望む未来」
- 2) パリ協定「気候変動枠組条約第21回締約国会議（COP21）温暖化ガス排出抑制」



- 3) 国連食糧農業機関 (FAO) 「食品廃棄物削減—2030年までに半減」
- 4) 主要国首脳会議 (G7サミット) 「海洋プラスチック憲章を採択」

パッケージを取り巻く世界共通の課題と背景をもう一つ。目まぐるしく進化を遂げる「情報通信技術 (ICT) が、社会、ビジネス、生活者を変える」という視点である。これからは一つ一つのパッケージが情報発信機能を持つようになり、それが「インターネットにつながる Internet of Packaging (IoP) の時代」になる。在庫が瞬時に分かり、在庫のムダがなくなるなど、サプライチェーンの見張り番としてもパッケージが貢献するだろう。誰が買った、何を買ったというデータがどんどん蓄積され、クラウドデータを活用したインターネットマーケティングも進む。アイデアはいろいろある。アイデアさえしっかりあれば、技術はもうある。「こういうことができたらいいいね」そういうアイデアを考える人が、今必要とされている。

主役となるのがミレニアルズ世代と呼ばれる若い生活者。デジタルネイティブとも呼ばれる彼らは、スマホを片手に忙しく歩き回り、ものからコトへ・所有からシェアへ・健康や自然志向・環境重視・多様性への理解・家事の外部化・ワークライフバランス重視というライフスタイルを生み出し、やがては親になって子供とともに、次世代消費の立役者になる。

4. 包装の未来「次世代に夢を託す」

2019年年頭の新聞紙上、最も目についたのは「つながる100億の脳」「頭脳資本主義が価値を生む」(Tech2050・新幸福論、日本経済新聞)、「2050年・AIの予測シナリオは、個人の生き方と新時代を左右」(エイジングニッポン、朝日新聞)などに代表されるように、IoTやAIがさらに一層身近になる時代に関するものであった。ESG投資という言葉も目についた。企業には、経済的価値と同時に、「なくてはならない会社」という社会的価値が求められ、AIにはそれによって新しい社会やひとびとの生き方が見えてくることが求められる。しかし、ここで描かれているのは、2045年ごろに、AIが人間の知性を超えるとされるシンギュラリティの世界であり、パッケージの新しい形は容易には見えてこない。

我々包装人に今求められているのは、「持続可能な開発目標 (SDGs) —我々が望む未来」を目指して、もっと身近な未来へのイノベーションであり、そのための努力である。非競争分野は英知と力を合わせて正面突破、世論やグローバルルール形成への参画もそうだ。

日本なりに築いてきた「ガラパゴス的な包装技術や包装社会」はそれなりに革新的でもあったが、世界が循環型社会に向けて大きく舵を切る中で、今や大きな転換期にある。

「包装」というのはきわめてニッチな分野であるが、その小さな窓を通して、世界(経済、社会、人々)が見える、未来が見える。地球は絶え間なく回っている。

小著を・海外に活路を求めておられる包装と関連企業の方々・これから包装のプロを目指そうとする次世代の方々・包装に関心を持ち、包装を大切と思って頂いている生活者の方々・長年私の背中を押し続けて頂いた方々に捧げたい。



【付録】各章の主題と副題

1. 包装の主流になった軟包装—イメージ—新を図る大手ブランドメーカーにも寄与
2. 独創が生み出す大きな価値—商品差別化戦略に乗った軟包装への転換
3. もったいない！食品ロス削減へ世界の動き—包装の役割を認識、新技術も登場
4. 政策誘導の EU、業界主導の米国—SAVE FOOD など世界の動きと注目される開封後の品質保持
5. 一回飲みきりサイズのワインが人気を博す—アルミ缶、プラスチック容器、パウチ、紙パックが続々登場
6. ミレニアルズ世代の消費行動と包装—お酒の“量り売り”に高まる彼らの支持
7. 次世代バイオ包装材料の萌芽—非可食性・未利用資源を活用する動きが世界で
8. 生活者とブランドをリアルタイムにつなぐ包装—スマホを手放さない彼らを引きつけるために
9. ネット販売で変わるパッケージの役割—店舗用との違いや共通点に待たれる議論
10. ごみゼロ社会への挑戦—若き液体肥料ベンチャー企業のビジネスモデル
11. サステナビリティ包装最前線—産業界に求められる大改革と未来へのヒント
12. 加速する本質的な環境論議—産業界の“勇氣ある”行動に生活者も注目を
13. 包装の“サステナビリティ”を再検証—企業・部門を超えた連携こそスピードアップがカギ
14. 軟包装を牽引するスタンディングパウチの成功モデル—世界のリーダー的地位を築いた“日本発”の製品も
15. Walmart の大胆な予測、2030年の消費者—ミレニアルズ世代の子供たちは何を選ぶのか
16. 注目の SDGs と食品ロスへの挑戦—欧米で動き始めた法整備や民間の取り組み
17. 今、包装新技術は“大学発ベンチャー”が面白い (1) —ユニークな発想は長期的スパンの視点から
18. 今、包装新技術は“大学発ベンチャー”が面白い (2) —ゲームの流れを変える動きは日本でも
19. 軟包装への流れが止まらない—世界軟包装会議 (Global Pouch Forum 2016) からの報告
20. 硬質容器からも目が離せない—ガラス、金属、成形容器のトレンドをめぐる明暗
21. 軟包装でも高まるリサイクル機運—石化大手やコンバーターが始めた新たな挑戦
22. 専門性と透明性で評価の高い包装の業界団体—情報の分かりやすさも魅力の米国軟包装協会 (Flexible Packaging Association)
23. アクティブおよびインテリジェント物質の PL 化—包装新技術の“るつぼ”はビジネスチャンスからも重要
24. 世界で浮上するプラスチックリサイクル問題—リスク回避への対応が急ピッチに



- 25.変貌する米国の小売業とパッケージの対応(1)－筆者が定時定点観測する街、シアトル見聞記
 - 26.変貌する米国の小売業とパッケージの対応(2)－“実店舗”対“ネット通販”の戦争勃発が与えるパッケージへの影響
 - 27.フードロス削減を目指す“賢い”ラベルたち－おいしく安全に食べられる残余期間を伝えるためのあれこれ
 - 28.循環型経済への機運を高める海外大手企業－各界の技術や知見を動員し2025年に100%リサイクル化を目指す
 - 29.進む包装用紙のマルチバリア・イノベーション－リサイクル化・脱プラスチックの流れの中で
 - 30.近未来の包装メガトレンド展望－読み解くカギは「循環型社会」および「デジタルネイティブな生活者」
- [展示会レポート]動き出した“Packaging & Printing 4.0”－interpack2017 国際包装産業展に見る世界スケールの包装新潮流

【お申し込み先】 株式会社クリエイト日報 出版部 <<http://www.nippo.co.jp/book/>>
Amazon.com からもお買い求め頂けます。